

【竜田姫】 たつたひめ

奈良斑鳩の法隆寺より西へ住宅地を2kmほど歩くと竜田川の川辺にたどりつきます。この辺りまで歩くと古寺の趣は消え、住宅地が広がり人々の生活の匂いがしてきます。

竜田川は奈良県西部生駒山地と矢田丘陵の間の生駒谷を南流し斑鳩町の三室山南部で大和川に注ぐ川です。斑鳩町より上流は生駒川と呼ばれています。

竜田川は平安時代、紅葉の名所として名高く勅撰集にも多く登場しています。

いにしえより、この川には竜田姫という秋を司る女神が居ると伝えられてきました。

紅葉は錦織に喩えられますが、竜田姫は染織物の名手であり、時雨を縦糸に露・霜を横糸にして織ったといわれています。

紅葉の色は時雨・露が染めたと思われていた古代・中世ならではの発想ですね。

竜田姫はよく佐保姫と対のように扱われます。佐保姫が春霞の化身であるのに対し、竜田姫は紅葉の化身となります。

古人は、春と秋を神格化・擬人化して捉えることがありました。『古事記』応神天皇の段、秋の紅葉を擬人化した秋山之下氷壯夫(あきやまのしたひをとこ)と、その弟、春霞を擬人化した春山之霞壯夫(はるやまのかすみをとこ)が最古の例と思われています。

佐保姫と竜田姫はいつから対に扱われたか分かりません。しかし、五行説では春は東、秋は西であり、竜田と佐保両地の位置にみごとに適います。

謡曲『竜田』に竜田姫は登場します。ある回国の僧らが竜田明神へ参詣しようと紅葉のさかる竜田へ赴き竜田川を渡ろうとすると、一人の巫女が現れ、

- ・ 竜田川紅葉乱れて流るめり渡らば錦なかや絶えなむ 『古今集』よみ人知らず
〔竜田川に紅葉が乱れて流れている 渡ろうとすると錦の紅葉が千切れてしまうだろう〕

の歌を唱え、川を渡らないように呼び掛けます。問答の末、巫女は僧ら一行を明神へ案内し紅葉が神木であることを語り、宮参りの間に自分は竜田姫であることを明かし姿を消してしまいます。その夜、僧らが社殿で通夜をしていると竜田姫が神の姿で現れ竜田の紅葉をめで夜神楽を舞い昇天するという話です。

日本料理の〈立田揚げ〉は醤油の赤色を紅葉に見立てた名だそうです。

業平の歌 ・ちはやふる神代も聞かず竜田川韓紅に水くくるとは

の韓紅(からくれなゐ)を醤油に見立て、醤油に潜らせたからという俗説もあるようです。

その他〈立田豆腐〉も海老の赤色に因んでの名です。

ある日本料理の専門家のお話によると、立田と名の付く料理の盛りつけには紅色のみならず、川の流れを表す白いものを添えるのだそうです。

『大正名器鑑』所載の斗々屋茶碗、柿の蒂茶碗の代表作に銘「竜田」があります。赤い肌からの銘なのでしょう。

かつて、ある茶事で銘「竜田姫」という紅葉呉器・でおもてなし戴いたことがありました。この時季になると必ず思い出す茶碗です。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~